

## 全体討論：『「哲学スル」とはということか』に向けて

(司会者からのメッセージ 浦井 憲) 2018.7.11

### 1. はじめに

村田晴夫先生の「哲学スル」は、あくまで村田晴夫先生の「文明と経営」における、およそ研究の方法とも言うべき位置付けにあるキーワードであり、また、それ故にカタカナで書いて下さったところと理解しております。

しかしながら、村田康常先生が前年そのきっかけを与えて下さった言葉どおり、「専門を異にする」我々の間で、それぞれの学問にとっての「具体性を置き違える」について、相互に思考を深めていこうという意味からも、各学問における「哲学スル」とはということか、そこから入っていくことも、また有意義な問いになるではないかと思っております。おそらくそのような「問い」は、専門を超えた形で、学問共通の普遍性を持った哲学スルとはということかという議論を、必然的にもたらずと期待しております。

どこまでも問う、徹底的に問う、それが「哲学スル」こととして、村田先生のレジュメにもあるわけですが、それでは「問う」とはということでしょうか。問いに対して答えがあります。答えが無い(定まらない)問いは山のようにありますが、逆に答だけあって問いが無い、ということは無さそうです。その意味で、問いとは答に先立つものであり、問いと答のペアを指して、これを「知」と(狭義に)呼ぶならば、その意味で「学問」においては「知る」ことよりも「問う」ことの方が根源的ではなからうかと、そのように思われます。学問においては、「知る」ことそのものが目的、というところから更に一歩進んで、「問う」ことそのものが目的、と言っているのかなと思います。

個人的には、「問う」という行為の、「学問」における根源性、そしてできることならその形式および普遍性、ひいては「学問する」とはということか、に向けての一つの答を与えてみたいという、そのような方向に関心が向いております。よって、以下問いかけにも各所でそのようなバイアスがかかっているかもしれません。その点ご勘弁頂ければ幸いです。

### 2. タイトルの意図

まず全体討論のタイトルから、ご説明致します。

「哲学スル」とはということか

と題させて頂きました。今回の村田晴夫先生のご講演「文明と経営—その研究の方向」の中で取り上げられる内容(この5月の経営学史学会でのご講演と、今回のレジュメ)の下、おそらくこれだけ分野をまたぐ学際的な顔ぶれをもって、村田晴夫先生のご講演に向け問題意識を統一していくには、これが最も相応しいと「直感」いたしまして、このようにさせて頂きました。

もう少し付け加えますと、

「哲学スル」とはということか -- 社会の科学、経済学の方法、そして経営学史研究という立場を通じて

というのが、長いタイトルです。

これはまず第一には、昨年5月のセミナー後のBBS立ち上げに向けた、村田康常先生からのメッセージ:

私たちはそれぞれ専門を異にしますが、それぞれの学問にとって「具体性」とは何か、その具体性を置き違えるとはどのようなことか、学問における具体性置き違えがどのような帰結を文明社会

に引き起こすか、具体性を置き違えないとはどのような学的態度  
・方法なのか、そのためにどうすればよいのか(村田康常氏)

を起点に意識しております。我々は専門を異にしてはいますが、おそらく何らかの形で、「哲学」、社会の科学、経済学の方法、そして経営学史研究に携わっていると思います。まずは、それぞれの立場で考えようということです。

そして第二に、上の村田康常先生の問いかけに対する、村田晴夫先生のお答えの一つが

「哲学スル」

でもある、ということです。これは前年5月のセミナー「文明と経営、その哲学的展望に向けて」における村田論文の結論の一つでもあったと思いますし、また今年5月の経営学史学会でのご講演においても、故に今回のセミナーでもまた、一層明確な形で強調される事柄の、一つであろうと思われます。

そして第三には、私自身の問い、その最も知りたいこともまた、この

「哲学スル」とは、ということなのか

という問いに集約している、ということがあります。前年、「普遍論理」といったような言葉を持ち出して来たり、あるいは塩谷先生に示唆して頂いた「場所」という問題(そういういわば主語的ではない、場所的な論理というようなもの)、そういうことに拘ってまいりましたが、それはすなわち「学問する」とはということかという問い、その「営み」についてのその「根拠」、あるいはその「自由性」、ということです。

村田晴夫先生は「哲学」を「学問の学問」と位置づけられているところと思いますが、ならばそれは「学問」であるわけですので、そうであるとすれば、その「営み」は、それが如何なる主体 subject 性を持ち(いわば如何なる場所に置かれ)、そして如何なる限界を持つのか、そのギリギリの境界の何であるかについて、問いつづけられるべきであるというように、私には思われるのです。

以上が、このタイトルに込められた意図になります。

### 3. 村田先生のレジュメを基調とする司会側からの「問い」

村田晴夫先生のレジュメを受けて、皆様にお聞きしたい内容を、簡単に以下まとめます。村田先生のレジュメの番号および小見出しに従って、述べて参ります(基本的には、以下赤字部分が、私から皆様に向けた「問い」になります)。

・ I 認識と実践 ― 20 世紀、企業文明を巡って

・ 1.1 における経済学と経営学の相違:

これについては、特に経済理論の側から見て、貴重な問題提起と見なすべきところと思っています。今回の一般向け広報においても、

...今日の経済学理論のアポリア、「動学と静学」の壁を打ち破  
る可能性を最も有望な形で秘めた議論...

といった言い方で述べさせて頂いたことです。経営学の視点は、そもそも経済学理論において最も不足しているところ(例えば「経済人」という概念の硬直性のようなものをその代表として)を出発点にしていると思いますが、当該研究テーマにおける「成り行くもの becoming」としての組織という把握の仕方は、そもそも経済学理論においても、全視点を180度変える(特に動学に向けて)重要な考え方を提供しているのではないかと、私の問い(特に経済学理論の側に向けてということになってしまいますが)になります。

例えば、不確実な将来を含めた「合理性」という問題があります。人間が「成り行くもの」である

限り、その合理性もまた「成り行くもの」として把握されねばなりません。未来永劫に渡る「最適な経路」を、「置き違い」された合理性の下で把握する、あるいは考えられないから考えない、といったこと（これは現状であると思います）に対して、より普遍的な合理性をもって、「これはありえない」という経路を削除する、そして残った経路の中での、種々可能性を考察する、ということの方が、本来の動学ではないかということです。ケインズの一般理論は、元来がそういう「よく分からないこと」の上に立って構築された「一般理論」を目指していたはずですが、いつしかマクロ経済学においては、特殊な仮定の下で、言えることを探している、といった状況が学問の趨勢になっているように思われます。

・1.3. 文明の5段階〈真理 Truth、美 Beauty、冒険 Adventure、芸術 Art、平安 Peace〉の生成 (ホワイトヘッド Whitehead, A. N., Adventures of Ideas, 1933):

今回の一つの重要なキーワードとしてこの5つの quality の概念があると思います。Truth と Beauty は、通常言うところの真、善、美をすべて兼ね備えたような概念であり、そこに copy でないものの追求精神といった意味を持つ Adventure と、そうしたものを有限性の中で追求した形としての Art が挙げられ、そしてそれら全てをもって未だ足りない、最後の quality として Peace が挙げられる、というような位置づけとして理解しております。後段との関係上、ここで注目しておきます。

・1.4. 企業文明が内包する根本問題:

この形での根本問題の把握と、「具体性の置き違い」(専門科学における置き違いと、それを受け入れて専門家に問題を投げつけてしまう、一般の人における置き違いという、この文明に関する文脈では、実は二つの側面があるように思いますが、いずれも粗く言えば同じことかとも思います)について、これは前年からの問題意識であり、春にも村田康常先生にもお話頂いた懸案事項です。今は、「**真の具体性というものが、成り行くもの、ということにある限り、そして近代科学がその背後にある論理として主語、対象物、を起点とするような論理体系を持って構築される限り、具体性の置き違いが生ずるのは、必然である。**」ということ、ある意味一つの結論としても、ここでは良いのかなという気がしています。これについて、再度皆様にお聞きしたいところです。(通常の論理体系に比して、一層述語的な論理体系、常に関係性的な転回を意識した論理体系、誤解を恐れず言えば「場所的な論理」といったもの、がそういった弊害にある程度対向し得るものではないかとの気持ちも込めて、伺いたいと思います。)

「成り行くもの」としての「組織」という考え方を、特に「経済学」という学問で考える場合、その動学的失敗、資本把握の失敗、人間把握の失敗は、具体性置き違いの顕著な例としてあまりにも明白です。(不完備市場の一般均衡理論は頓挫しました。貨幣的均衡の最適性の問題は放棄されました。答が出ることだけに問いが限定されるようになりました。)そして**例えば行動経済学、メカニズムデザインといった流れにおいては、そうした具体性を置き違えたまま、それを道具化する、つまり、都合良く使えそうなところだけ使う、というスタンスですが、これは結構、危ないことをしているような気がします。**産業や、政治はそういう「答」の出た学問「知」のみを利用しますが、通常問われるべきであり、答の出していない問題というものは、それよりもはるかに多く残されています。産業や政治が、そういう形で学問を使うことは当然ですが、学問の側が、そういう使われることを「目的」にするならば、実はそれが「最も大きな具体性の置き違い」ではないだろうか、という話です。(これもまた、経済理論に向けた問いになってしまいますが。)

ただし、村田晴夫先生における「経営」あるいは「組織」の「営み」ということ、そして「人間」も含めて、「成り行くもの becoming」という考え方も、極めて広い一般的概念であり、ここでは特に**20世紀の大企業、20世紀の人々、個の欲望、といった特殊性に対して、その解決策を一気に与えるものと成り得るかどうか。それが、21世紀に向けた指針として、ダイレクトに適用可能で(はあると思いますが、果たして)有効なものとなり得るか。**この点については、まさしく今回も含めて、この先しっかりと議論していかなければならないと思います。今回の「哲学スル」とはどういうことか、はそのための試みであると思っております。

・II 経営学史研究の意義

・III「哲学スル」経営学

経営学および経営学史についての専門的知識不十分ながら、当該の村田先生のご研究の文脈から申し上げれば、「経営学史研究」とは、今や20世紀の「企業文明」を作りあげた大企業、そしてその「経営」について問うのが経営学、そしてそういう企業の学問に対する、そのまた学問が経

営学史研究である、ということになるかと思えます。すなわちそれは「学問の学問」として、哲学、しかも今日の我々の生活の現実に関わる、最も重大な意味を持った哲学そのものということになると思えます。故に経営学史研究において「哲学スル」ということの重要性を語っておられる 3.1, 3.2 においても、単に一分野の「哲学スル」重要性を語っておられるのではなく、それを通して、「哲学スル」ことの全学問(およそその学問の社会における位置といったことを考える限りにおいては)での、重要性を語っておられるものと、私は捉えております。

加えて言えば、「社会」の「科学」というものにおいては、しばしば言われますように、そこには必然的な自己参照性がともないます。すなわち「科学」や「学問」もまた、「社会」の一部を形成する、という側面です。その意味で言うと、「哲学スル」という、この極めて重要な学問作業は、いわば最も根源的かつ重要な学問作業として、「社会科学」(あるいは「社会」についての「学問」、「社会」についての「問い」)的にも、まず最初に取り扱われる必要があるであろう、と私は思います。

当方が、普遍論理とか、また場所の論理とか、あくまで論理ということに拘っておりますのも、要は「学問とは何か」という「社会」についての「問い」という観点から、つまり最も一般的な「学問とは何か」ということについての定義を与える可能性として、「学問」が「自由」なる「根拠」を持つことのできる可能性として、学問は学問と学問ではないものとの間に、学問として線を引けるのでなければならない、と考えるからです。とりあえずそのことの是非を横に置くとしても、そうした可能性を踏まえて、「哲学スル」とはどういうことか、というそのような「問い」は、社会の科学の問いとしても、まず最初に問われるべき「根本的な問い」ではないかと思われまます。

そこで、村田先生が述べられた「哲学スル」についての最重要事項、「問う」こと。これについても、さらに「問う」必要があるのではないかと考えます。「哲学スル」ということが単にスローガンであるのではなく、真の人知の基礎として、21世紀の指針として、成立し得るためには、問うとは何かを徹底的に問わねばならないのではないかとということです。これには、「知る」と「問う」こととの関係、そこにおける「問う」ことの根源性、自由性、そしてそういった葛藤を経て、学問という営みがまた平安へと至る、いわば「真理」から「平安」への道筋、といった内容がともなうのではないかと考えます。そして、そのための「宗教」と「学問」、「道徳」の関係(西田的に言えば、そのための「場所的論理」)、といったこともまた、その欠くべからざる内容になるのではないかと考えます。これが今回、私から皆様に問いたいことの最も中心となることです。

- ・IV 二十一世紀企業文明の考察
- ・結び——新しい「哲学スル」に向けて

「問う」とは何か。それは「問う」という「表現」として、通常我々が論理式で書いて命題化し得るといったことなどよりもずっと広いものを指さねばならないと思えます。そうでなければこれは科学哲学の20世紀初頭の議論の繰り返しで、終わってしまうように思えます。もっと広く、「問う」というのは、これは技芸的問い(音楽的、文学的、各種芸術的問い)といったものまでを含む Art としての「表現」であらねばならず、またそれは「他との関係性」としてはじめて把握される(位置付けられる)ものであると思えます。このような立場は、すでに前年の守永先生の立場と、かなり合致するところなのではと思っております。

また、「他との関係性」の「表現」として捉えられる、「問う」ということ、これは数学的に取り扱う(明確にその骨格の記述を与える)ことができそうに思います(圏論・トポス等)。それは「学問」の最も一般的な「形式」ということになるとは思いますが、そうすることで学問は明確な「根拠」と「自由」を持つことができるとは思います。同時に、その限界も持つと思いますが、むしろそれはそうした限界についての知が「真理」となることを通じ、むしろ最終的な「平安」へと至るのではないかと。私はそのように考えております。皆様のご意見をお聞かせ下さい。

#### 4. これからの課題として

4.1 「成り行くもの becoming」ならびに「具体性の置き換え」という問題は、今日の経済学理論あるいは「社会」の理論一般に欠落しているものについて、極めて包括的な議論を提供するものであると思えます。繰り返しにもなりますが、企業、資本そして信用あるいは貨幣、経済学理論における動学の壁、諸問題、全てに関わる非常に重要な視座が、成り行くもの、生成と消滅、といった考え方によって提供されるものと思えます。

加えて「合理性」ということについては、更に触れておきたいと思います。「合理的主体」というものは、自らの「生成」と「消滅」を「合理的に語れない」という側面があります。

具体的には「死」ということ、これは同時に経済学理論において、有限の生においてはできないこととしての貨幣、資本という問題に直結します。(世代重複モデルや二重無限性の下での貨幣の問題、目的関数の有限性を伴わない形での最適性の問題、資本蓄積の問題は、それを顕著に物語っていると思います。)

ワルラスの一般均衡モデルがその動学的側面において立ち止まっているところは、まさしく企業の生成と消滅、資本の生成と消滅、そして信用の生成と消滅に関わる事項です。合理性という問題と、死という問題を経済学理論において考えると言うことは、宗教というものを、経済学理論でどう考えるかということであり、それは**宗教とは何かということ**を、**社会科学的にきちんと定式化すること**であると思います。

4.2 「具体性を置き違える誤謬」については、経済学という一分野における具体性を通じて、今回これまでの議論を一層深めつつ、その理解を共有できる道具が出揃ったように思います。今後の議論の発展が期待できると思います。

4.3 今回は「哲学する」とは、また「学問する」とはどういうことかについて、議論を深めることを狙いとしました。村田晴夫先生の「文明と経営」論においては、学問あるいは哲学という「営み」もまた、そうした「文明」の中の「営み」としてとらえられることになると思います。そのような、まことに広い意味での「経営」という視点で、すべてを捉えるという立場に、あと一つ加えるべきとすれば、哲学スルとはどういうことか、そのこと自体についての、いわば「表現」上の「立場」、根拠。つまりは、「問うという表現」の成立するその境界について「問い続ける」ことが、伴われるべきではないのかということ、それが「営み」としての「学問」の「主体性」、自由性を与えることになるのではないかという、そのような考えからでした。更に考えていきたいと思います。

4.4 普遍性ということ：表向き(たとえば××主義的なものも含めて、思考停止的に他を排除する)表面上の肯定で和合するような意味での普遍性ではなく、絶対的な否定のその根源において通底するところの普遍性というものについて、考えて行きたいと思います。そのようなものをもって(実はそのようなもののみをもって)、はじめて「成り行くもの」としての人間についての、人類共通の願いとか、世界平和とか、人道主義とか人権とか、そうしたものも成立するのではないかと思います。

安易な肯定は、同時に表面的で安易な否定を生み、近代の戦争といったものが、多くそういう安易に共通された肯定(メディアコントロールも含めて)に基づいて来たように思われます。

学問に話を戻せば、西田幾多郎が「学問」、「道徳」の背後に「宗教」が無ければならない、と述べたようなところもまた、そのような絶対的な否定(これは禅における絶対的な本質否定や否定神学などにおいてとりわけ顕著に見られるわけですが)と、その果てに見出される存在の根拠ということではなかったか。そういう「宗教」の役割を、学問的(哲学的)に明らかにすることを通じて、今日の学問が、いかに真の意味で普遍的なるものを、自らの基礎として取り戻せるか、ということではなかったかと思います。

ローカルな民族主義や、個別の道徳価値観といったようなものも、そのような真に揺るぎのない基礎の上に立つのでなければ、グローバル化とか世界標準とか、そういった洗脳にコロッとやられるだけなんじゃないかと、そのようなことを、合わせ考えたところです。

4.5 普遍性と同時に、学問として、学問ではないものとの線引きについて述べました。学問について、それを他から線引きする一切の縛りが無いという場合、それは逆に、学問が他の一切からどこまでも限定を受ける可能性ということについても、また否定できなくなってしまうのではないかと、とも思われます。学問の自由性、**学問という営みの「主体性」**といったことについては、更に深く考えたいと思います。